



『知りたい気持ちを大事に』

高甫小学校

今年度、高甫小学校では、社会科学の研究に取り組んでいます。研究テーマは、「社会的現象に主体的にかかわり、自分の見方を広め、考え方を深める社会科学学習はどうあったらよいか」です。

四学年で行う授業研究では、「高甫のために尽くした人々」を主題とし、以下の願いを持って題材を仕組みました。「多くの先人たちが自然の厳しさを克服するために努力してきたことや地域の産業を生み出し励んできたことをつかみ、生活を向上させるためにがんばってきたことに気づいていく。」「子どもたちが主体的に調べ、学習を深める中で、生まれ育った高甫という地域に、さらに愛着と誇りを持つ。」

今年度は、研究テーマにある『社会的現象に主体的にかかわる』を軸として研究を深めてきました。私たちが最も大事にしたことは、「知りたい」「なぜだろう」という気持ちを醸成し、それを学習のエネルギーとすること



このように意欲を持ちながら、自分を取り巻きふだん何気なく当たり前のこととして社会的現象を、自分に引き寄せたとらえ、考えていくことが、生きる力につながる。ていくのではないでしようか。そのために何が

①先人たちとの出合いを丁寧に扱う。②知りたいことを整理し調査していく見通しをもつ。③調べたことを互いに共有し考えを広げる。 子どもたちは、初めてのことに

第217号

発行所 上高井教育会
発行人 上高井教育会理事長 一秀
編集人 片桐秀 委員 長市
小須坂新 須坂新聞社

です。意欲を持って調べ続け、考え続けてこそ、願う姿へと近づいていくことができることでしよう。

東京理科大学・小布施町 まちづくり研究所との連携

小布施中学校

小布施町では、平成一七年に東京理科大学との共同研究の場として「東京理科大学・小布施まちづくり研究所」が町役場内に開設され、「修景」の理念に基づき町の景観づくりがされてきています。

初めは小学生がこのワークショップに参加していました。やがて、小布施中学校でも、その活動に関わり二〇一〇年から一年生が大学生と一緒にワークシヨップをしてきています。二〇一〇年には、現在は使われなくなっていますが、人々が愛用していた道を、その頃の方法を使って再生する「里道づくり」を行いました。



笑顔になり、「でもこれは？」とまた疑問を持ちました。そしてまた知りたいたいと思いました。：。そんな子どもたちが自分の力で分かるうと追究していく姿を支えながら、共に学んでいきたいと思っています。(中澤 光)

が、事前に大学生との打ち合わせを行い、未来の「森の駐車場」を思い描きながらの、有意義な活動となりました。

◇「今日はワークシヨップがありました。今日は植えるところからしか体験していかないけど、肩も腰も足もすごく痛いんです。疲れたけれど、自分たちの手で木を植えるということができて良かったです。私は森の駐車場には初めて行きましたが、思っていたよりも大きな木がたくさんあると思ったり、自分達が植える木も思っていたより大きくてビックリしました。この体験をしたことで、大人になってからこの小布施に帰ってくるのが楽しみになっているのではないかと思いました。今日は疲れたけど、楽しかったです。」

このように大学生と共同して町づくりをする体験は、郷土としての小布施町に目を向け、その将来を担う一員として、郷土を愛し、大切に思う心の芽が育まれる活動になっていきます。(原 靖士)

教育会だより

- 7.31 教育会夏期講演会(メセナホール)
○講師 近代文学研究者 堀井正子先生
○演題 「金子みすゞ、子どもの世界」
8.1〜3 同好会夏期講習会
24〜25 日本連合教育会 呉大会 雲市花ホール
「元気で明るく賢い子どもを育てる」地域の絆・教育力を培う
27 上高井教研中間連絡会
特例民法法人実地検査
28 第三回研究推進委員会
29 第四回理事会
9.3 教育七団体代表者会
6 第四回代議員会
7 第五回同好会
24 教研学校代表者会(レポート交換日)
10.2 第四回研究推進委員会
3 第五回理事会
6 上高井教育研究会(相森中)
16 第六回同好会
20.21 郡市児童生徒科学作品展(シルキョール)
25 第五回研究推進委員会
31 第六回理事会
11.6 第六回研究推進委員会
7 郡公開研究会 中心講師 伏木久始先生
○社会須坂小「地域の先人 越寿三郎」
○国語 小布施中、算数 数学 日野小
理科 高山小、生活総合 豊丘小
図工 美術 森上小、保健体育 墨坂中
技術 家庭 墨坂中、外国語活動 英語 高甫小
道徳 特活 栗原小、特別支援教育 栗原小
健康教育 墨坂中、入権和教 東中
15 全日音研長野大会 郡研音楽(高甫小)
17 第十一回信州「教育の日」上田大会 五ヶ花籠
『ももに学び、ともを育む 環境づくりをめざして』
26 第五回代議員会
27 信教全県研究大会 上高井地区
30 第七回同好会
12.4 教研学校代表者会
18 第七回研究推進委員会
20 第三回研究委員会
21 上高井教育会報第二七号発行

弾季舞との出会い

栗ガ丘小学校

P T A会長さんから「運動会で弾季舞を踊ってもらえませんか？」というお話がありました。映像を見た瞬間、踊りは目に焼き付き、曲は耳に残り：と、強烈な印象でした。すぐに踊りだす子もいたくらいでした。

「弾季舞」は五穀豊穰を願う踊り。日照り続きの毎日に、子どもたちが四季神様(千支)にお願いをすると、雨が降り出した。その喜びと感謝の気持ちを踊ったというお話です。

全身から湧き出す汗と闘いながら練習を重ねました。商工会青年部の方の協力もあり、上達していききました。

踊る時の条件、「草鞋」も作りました。足の指は痛いし、藁はなえないし。四苦八苦しでしたが、一つだけの自分の草鞋ができあがりました。

運動会の日、真剣に、でも楽しそうに踊る姿がありました。八十三人全員の心が一つになって、踊り、声を届けようという思いが伝わってきました。「弾



季舞」に出会えて、真剣に向き合うことの楽しさを知ることができた子どもたち。こんな素敵な出会いの場を作っていたことに感謝せずにはいられません。

あれから三ヶ月近くが経つのも、踊ったり、口ずさんだりする姿が見られます。(福田貴子)

全職員の協力で

高山小学校

九月十五日、高山小学校大運動会が晴天の下、開催された。練習中の暑さを思うと幾分しのぎやすい天候となったが、厳しい日差しに変わりはない。しかし、暑さに負ける子は一人も出なかった。

高山小学校では、練習中の厳しい暑さから、運動会当日の日差対策について早くから話題になっていた。学校長の「児童席の日差しを遮れないか」の思いを、全職員で受け止めたものだった。最初は四百超の全児童席を覆う方法など思いもよらな



ったが、日差しを遮る効果と費用と作業の大変さを勘案しながら、ようやく遮光ネットが児童席を覆う方法へと辿り着いた。学校のテント四張

の他に七張を全職員で運んできた。骨組みのみを組み立て、遮光ネットで児童席四〇m余りを覆った。四〇mに渡り遮光ネットをスズランテープでパイプに縛る地道な作業。上を向いたままの作業は肩の凝る辛いものであった。

運動会では、低学年の子はグッタリ疲れてしまうのが常だが、テントの効果もあって、プログラム最後のリレー・全校ダンス・閉会式も、しっかりとした態度で参加することができた。まさしく遮光ネットの「お陰様」であった。(田鍋隆行)

学校行事特集

止のために、危険性の高い区域に大きな砂防ダムを設置してい

本校の中核活動

思いの表現

墨坂中学校

本校生徒が自信を持っていることの一つに「挨拶」があります。墨坂中学校を訪れる方々にはもちろん、日常校内ですれ違う毎に自然に「こんにちは」と声をかけあう姿が見られ、心地よさを感じています。

昔から「動の墨坂」と言われるように、墨中生はのびのびと自分を表現し、はじけるパワーを様々な場面で披露します。例えば、墨坂祭のイメーჯソングや応援合戦は一人一人が体中のエネルギーを出し切ります。体育館に張り裂けんばかりの音量が響き、観る者の心に共鳴し、感動を巻き起こします。これらは、誇るべき伝統として代々受け継がれてきたものですが、日々本校が積み重ねている「中核活動」がもとにあります。

生徒会スローガンに「響け！歌声」とありますが、本校では朝夕教室から歌声が響いてきます。一昨年から四部合唱になったアカペラの校歌は、全校五二〇名と職員が共に歌い上げる壮大なハーモニーです。先日、同窓会の皆さんがミロのヴィーナス像を修復し寄贈し



てくださいました。その皆さんにお礼の気持ちを自慢の歌声で届けました。折しも真っ青な秋空の下、全校で作り上げたアルミ缶アート壁画を背景に、中庭に轟く校歌は、聞く者の心に染み入りました。

また、今年「思いを表現する生徒」を重点教育活動の一つにし、授業はもとより生徒集会、学年集会でディスカッションの場を多く設けてきました。その成果を、全校ディスカッション「絆ってなんだろう」東日本大震災から考える」という生徒会企画として学校祭で示しました。

全校の前で自分の意見を挙げて発表することは勇気が要ります。これは、表現力だけでなく、伝統と誇っている膝つき四回がけ清掃で、「一人になる、一人にさせる」自立の力も同時に鍛えてきた賜です。「自分を鍛え豊かにし、その自分を体中で表現することで、自身や周りを感動させる喜びを体感できる一日」をつくることに力を入れている本校です。(松澤智恵子)

「故郷たかやま」

「総合的な学習の時間」の取組みを文化祭で発表

高山中学校

高山中学校では、「故郷高山村と私」を全校テーマに、三年間の長いスパンで学習を展開しています。

一学年では、「故郷高山村」と題し、高山村を知る活動を行っています。村内の伝統文化、郷土芸能、歴史、自然、環境、福祉、観光等を学習の対象に、調査活動や体験活動をする中で、「もっと知りたい、知らせたい」と、村紹介のパンフレットを作成しました。

二学年は、「私の人生設計」で、村内の事業所での職場体験

を通して、高山村の方々から働くことの担う責任や喜び、高山村の特色を生かす工夫や努力を学びました。

三年生は「故郷高山村の将来と私」で、三年間の総決算として高山村を守り、発展させるための提案をしました。

「高山村に災害が起きたとしたら不安に思うことのアングレトで、家族がバラバラの間帯での安否確認、土石流などが起きた時の避難、お年寄りへの対応、避難所生活等が多くありました。高山村は土砂災害防

ますが、自然は人間の想像を超えていきます。私たちが少しでも多くの人を救おうと努力するならば、



想定外のことで想定する必要がある。今できる防災対策を村民一人

一人が精一杯やれば、被害を最小限に抑えることができます。大切なことは、協力です。」と。

高山村のこれからを考える中で、自分の進路や将来に向けた生き方やあり方を見つめています。(松本智子)

魅力ある校友会

常盤中学校

常盤中校友会(生徒会)では、各委員会が独自の活動を進める特別活動がたくさんありますが、その一つに、体育委員会が取り組んでいる活動があります。多くの生徒や職員の思いを受け止めた、大変盛り上がる活動です。

本校生徒の部活動加入率は決して高いとは言えませんが、運動や体を動かす遊びに対する欲求は高いと思います。そんな生徒達の願いを具現化するために、体育委員会では、バ



レーボール大会や水球大会、駅伝大会、そして校歌にも歌われる鎌田山への登山等を計画し、毎回多くの生徒達が参加しています。例えば駅伝大会は、応援や運営に携わ

る生徒・職員を含めて約一四〇人、鎌田山登山にいたっては約一七〇人と、半数近くの生徒が参加しているのです。決して強制参加ではなく、体育委員会の呼びかけに賛同した生徒達の、自主的な参加です。

普段は、やらされている感覚の強い運動も、自主的なチーム作り・運営を行うことにより、運動に対する意欲向上はもちろんです。「自らの意志で運営する校友会」に近づくことができるとののだと思います。これからの魅力ある校友会活動が推進されていくことを願っています。(伊藤 浩)

本校の宝(61) 井上小学校

「受け継がれるもの」

過去の会報を探り、以前は井上小学校の宝として何を挙げていたのだろうか調べてみました。すると、平成七年度を初めとして過去三巡に「語らいの広場(中庭)」「校庭を囲むソメイヨシノ」「子どもたちお気に入りの大イチョウ」の記事が記されておりました。この三つは現在も大切な本校の宝です。

二十年前に造成されて以来、「語らいの広場」は子どもたちの心を潤す親しめる広場であり続けています。本校では縦割りでのレクリエーションや清掃を行っており、このような活動で知り合った異学年



の子どもたちが一緒に遊ぶ姿が見られます。春には、一年生が六年生に背負

わけて満面の笑顔を見せる姿、読書旬間には何人かの子どもたちが一緒にベンチに座り、絵本の読み聞かせをしあっている姿等、いつも微笑ましい光景がそこにはあります。校庭の桜は、花の時期には残雪の五岳を背景にすばらし



い景観を見せ、お花見給食は毎年の楽しみの一つです。地域ののお年寄りもこの時期よく校庭を訪れ、桜と共に、そこで遊んでいる子どもたちをにこやかに見つめておられます。近年の猛暑で、桜の木陰は、運動会練習時の涼む場所として、なくてはならないものになりました。

校庭の大銀杏では木登りを楽しみ、休み時間には枝葉の中から子どもたちの明るい声が聞こえます。一昨年、枝から落ちてケガをしまった子がいました。「木登り禁止」の声も出かかったのですが、この子の保護者から「このことで木登りを禁止するようなことはしないでください。私自身も子どもの頃この木の上で友だちといろんな話をしたことを今でも覚えているんです。大切な場所です。」との申し出がありました。

本校の宝は、これからもそのまま地域の宝として受け継がれていくことでしょう。(中村竜太)

火ばら 談義

火ばら 談義

カッ
常盤中 酒井秀雄

歴史談義

三井 清隆

「平清盛は、先駆的な考えを持っていたよね。」「あの時代において、海外に目を向けるとは…」等と、会議がなかつたり、勤務時間も過ぎたりといった放課後のあるひととき、歴史談義になるところがあります。自称「歴史」と公言されていた先生（転出されましたが）の影響もあるのですが、大河ドラマや読まれている歴史の本でのコメントから、歴史上の人物やその時代の背景について、歴史うんちくを述べ合うのです。これが、実におもしろい。校長先生は、「大の城好き」とあって、「どこそこの城はこうだった」とか、「行ったことある？」とお話されるので、更に熱が入ってくるとい感じじです。ある先生が、「この休みに、平泉に行ってきた」とか「京都の〇〇寺や…をまわってきた」という話が出る、もう体の中が熱くなってくる…。大河ドラマで、「本当にあ

あだったんですか」という質問が耳に入ると、「いや、あれはね」「ちょっと、許せない」「本当はね」と待ってましたとばかりに、口々に人物像を物語りま

す。ドラマなんですけどね。でも、それがきっかけで、もう一度調べ直してみようとか、今度、現地学習してみようかなという気持ちになります。それが、研修意欲というものなんですよ。か。蒙古襲来時の元軍の船が発見され、蒙古襲来絵詞に描かれていた船とは構造も大きさも違うという新たな発見があった、というような新情報も見逃せない。幕末のフルベッキ写真に写っている人物達（西郷？龍馬？岩倉？）はいったい何を目指しているのか、真実は一つなのではないか、それがわからなるところが歴史であり、それが魅力であり、さまざまにイメージを膨らませることが出来る。歴史の楽しみ方は、いろいろありますが、それを共感し合える仲間がいるというのは私にとってうれしいことです。

(日野小)

ようこそうさぎさん

神田 由美子

「うさぎをふやそうと思いませんか？」という声とともに、クラスに二羽の赤ちゃんうさぎがやってきました。

担任する二年生の子どもたちは、今、一羽のうさぎを飼っています。おじいさんうさぎで、とても恥ずかしがり屋。いつも穴を掘ってその中にいます。子どもたちがえさを持っていくと、時々出てきてえさを静かに食べる。二羽で静かに暮らしているおじいさんうさぎ(ラッキー)です。



そんなラッキーに新しい仲間が突然やってきたので、もちろん、子どもたちは大歓迎。「名前は？」「ラッキーと一緒に飼えるの？」

名前をどうやってつけるのかも考えました。「二年で考えた名前がいい！」「全校にアンケートをとったら？」話し合いをして、全校にアンケートをと

り、名前が決まりました。二年生の希望の名前にはなりませんでしたが、子どもたちは納得し、ひと段落です。



しばらくすると、二羽のウサギが暮すケージが汚れておいて、いきな

ました。

「先生、そうじをしなきゃー！」

待ってました、待ってました、その言葉、その気づき。私が声にかけて掃除をすすめるのは簡単だけど、それよりも、自分たちに自ら気づいてやってほしいな、と思っていました。

掃除が始まりました。汚いケージです。まずは敷いているわらを取りました。ぬれて汚れていて、におうし、つかむのにも抵抗があります。でも、自分たちでビニールを広げ、何とか取り出し、ケージを洗い、掃除が進んでいきました。はじめは立って見ている子やウサギをだっこしたままの子もいましたが、「一緒にやろうよ！」という声もあり、掃除に関わる子が増えてきました。

二羽のうさぎに多くの子が目

を向けている時、今度は、「ラッキーがかわいそう」と休み時間にラッキーに会いに行く子が出てきました。「ラッキー一人でかわいそうだよ」「一緒にしてあげようよ」という声も出てきました。こうして、子どもたちが優しい気持ちを持ち、飼う事への責任を持ち、自分で気づき行動してくれることが嬉しいこの頃です。(豊丘小)

編集後記

猛暑の中でスタートした二期も、美しい紅葉の時期を経て、いよいよまとめでなりました。各校とも大きな事故等もなく、当初に計画した行事が滞りなく行われたことと思います。子どもたちの成長が認められ、一つ一つの活動から十分に充実感を得られたのではないのでしょうか。

さて、ここに上高井教育会報第二一七号をお届けすることができました。各校で行われた工夫いっぱい、教育活動や先生方の思い・実践の記録等がぎっしりと詰まったものとなりました。一行一行、一文一文より、各校・先生方の熱意を感じ取っていただけたら幸いです。

お忙しい中、玉稿をお寄せいただき、ありがとうございました。心より感謝申し上げます。お体に気をつけて、よい年をお迎えください。(伊藤)